

## 「たった一年、でも一生」

四中合格を喜んで呉れた父が、入学の2週間後に北京で戦病死した。跡を継いで立派な軍人になりなさいと洗脳された私は、当然のように陸幼（陸軍幼年学校）を目指した。それを知ったダイシェンは厳しく私を鍛えて下さった。終戦後の先生を知らない私には、近寄りがたかったダイシェンの勇姿がそのまま残っている。丁組からは6人が合格して翌年、西八王子の健武台で将校生徒の日々が始まった。しかし4ヶ月半で敗戦。焼き尽くされた校舎の跡地で玉音放送を聞いた。「これから親元に帰り、文化国家建設に努力せよ」と訓示を受け、背囊を背負った敗残兵姿で父の生家に疎開していた母の元に辿り着いた。それから大学のため上京するまで4年半、戦後の苦難の時代を新潟の小さな城下町で過ごした。

私と四中とのご縁は、たったの1年。それでも同窓会名簿で昭和25年卒の仲間と名前を連ねているのは、武士の情けか、ダイシェンのお蔭か。長男が四中の焼け跡に建った牛込三中を卒業し、次男が戸山高校を卒業した親子合算の特典かも知れない。「たった一年、でも一生」級友諸兄の変わらぬご友誼に感謝は尽きない。佐内坂を登って四中に通い始めてから74年、友はそれぞれの歴史を背負いながら老いて逝った。今日ここに大丁会の幕引きを見届けられる者は元気で動けるといふ天の恵みを授かっている。生きている限り、激動の時代の生き証人であり続けよう。